

鹿児島県における中世墓研究の現状と課題

—発掘調査で発見された墓を中心として—

上床 真

The Present Situation and Subject Matter about Study of Tombs in the Middle Ages in Kagoshima Prefecture

Uwatoko Makoto

要旨

県内の中世墓の様相については、現在まで検討される機会に恵まれなかった。そこで、本稿では、遺物の集成を行うことで現状を把握し、課題を掲げることで今後の研究のたたき台となることを目的とした。その結果、全国的に見て特異な墓は少ないものの、中世には長方形土坑墓（木棺墓）が多く近世に円形土坑墓（桶墓）が多いこと、墓としては土坑墓・集石墓・周溝墓・その他の4類型に大分類されることが明らかになった。これらの現状をふまえ、いくつかの課題を提示した。

キーワード 中世 土坑墓（木棺墓・桶墓） 集石墓 周溝墓

1 はじめに

筆者は「墓」と聞いてまず「墓石」という言葉が頭に浮かぶ。「墓石」は即ち「墓標」であり、現代の墓は墓標なくしては語れないものと考えられる。

死者を葬る方法には大きく分類して火葬と土葬がある。我々が目にしている現代の墓はほぼ火葬であろう。¹⁾土葬の場合、墓標のないものもあると考えられる。

翻って中世の事例をみると、墓標としての石塔や板碑についての研究（もしくは調査）は鹿児島県内でも多くみられるのに対して、発掘調査で発見されるような墓標のない墓（ただし多くは残っていないだけである可能性も高い）、もしくは墓標の下の施設（土坑・石室など）についてはあまり研究例がみられない。そこで、本稿では、発掘された中世の墓について資料を集め、現状を把握し、課題を提示したい。

2 鹿児島県内外の調査・研究の概観

恵美昌之によれると、中世墓についての黎明期の研究には、江戸後期に著された中山信名の『墳墓考』、1899（明治32）年の平子輝翁による「本邦墳墓の改革」、1919（大正8）年には高橋健自による「中世の墳墓」などがある（恵美1990）。

この中で高橋の「中世の墳墓」は、考古学的研究として、もっとも早いものである。高橋は石塔婆と墓城内施設の内面から検討を行っている。特に墓室については、はじめての研究であろう。

これ以後、民俗学・歴史学・美術史学・考古学などの様々な視点から全国各地の中世の墓について調査・研究が行われてきた。特に静岡県一の谷遺跡の調査成果には目をみはるものがある（網野・石井ほか1997）。

ここでは、九州内の研究について、発掘調査によるものを中心として進めていきたい。また、近世のものについても触れながら県内についての研究略史を述べたい。

九州の例として早くから注目されたものとしては、熊本県尾彦遺跡の例がある（熊本県教委1973）。ここでは、「語り墓」とされる方形周溝状の塚の周囲に土坑墓群がみられる。墓域が明らかにされている注目すべき遺跡である。

この他には、福岡県広川町の野田墳墓群・佐賀県基山町千塔山遺跡（基山町遺跡発掘調査団1978）・大分県耶馬溪町後山墳墓（渋谷・上野1975）・宮崎県清武町山内石塔群（宮崎県教委1984）・宮崎県宮崎市の余り田遺跡（宮崎県理文センター1997）などがあり、特に九州北部（福岡県・佐賀県・大分県）の調査・研究（原田1999等）がリードしている感がある。

鹿児島県内の中世墓研究は、石塔についてのものが大多数を占めているといっても過言ではない。県内各地の石塔については、積極的な調査がなされており、資料化されているものも多い（川内郷土史編さん委員会1974等）。筆者の力量もあり、本稿の本来の目的ではないので多くは触れないが、たとえば考古学の分野からも松田朝由が近世墓の研究を行っており（松田朝 2004）、多方

面からの研究が展開されつつある。

一方、発掘調査で発見された中世墓をみると、九州全体にいえることであるが、北部九州を除いてあまり注目されてこなかった感がある。以下に鹿児島関連の中世墓研究史についてふれておきたい。

1972（昭和47）年には、小田富士雄によって「大隅・山宮神社発見の中世墓器」がなされ、志布志町山宮神社の遺物が紹介された（小田1972）。

1974（昭和49）年には高尾野町放光寺遺跡の発掘調査が実施された（鹿児島県教委1976）。これは、おそらく県内ではじめての本格的な中世墓の発掘調査である。この調査で集石墓・石室墓・土坑墓とされる遺構が発見された。

同年には、溝辺町桑ノ丸遺跡で66基にもおよぶ近世墓群が調査された（鹿児島県教委1978a）。いずれも円形で、人骨や棺桶の残片や釘金具が残存しているものもあった。聞き取り調査によれば、周辺住民は、ここが墓であったことを記憶していないということであった。個々の遺構については、実測図などが報告書に掲載されていないことから、この当時の近世墓についての関心の低さが看取される。

1975（昭和50）年刊行の『新版仏教考古学講座』の「九州」（渋谷・上野1975）をみると、鹿児島県の中世墓は取り上げられていない。この時点では、まだ県内の資料は全国的には注目されていなかったようである。

1978（昭和55）年には笠沙町西之藪遺跡で、6基の土坑墓が発見された（鹿児島県教委1978b）。これらの一つに「享保」という年号があるので、近世のものと考えられる。近世の墓についての詳細な遺構調査としては、最初のものである。県内における「墓」の考古学的調査の黎明期のもので重要であろう。ただし、ここでは個別の実測などは行われていない。これらは、平面形が長方形であることから木棺墓である可能性が高いと考えたい。

1980年には、枕崎市松之尾遺跡では、中世末～近世にかけての砂坑墓（土坑墓）に埋葬された人骨群が発見された（枕崎市教委1981）。個々の遺構についての実測図などはないものの、人骨については形質人類学的分析による詳細な所見があり、形質的には近世人とみなされた。

1980・1981（昭和55・56）年に実施された川内市成岡・西ノ平遺跡の調査では、中世墓と近世墓のいずれについても詳細な遺構調査がなされた。筆者の知る限り、詳細に中近世の墓が調査された例としては、県内でももっとも初期のものであろう。これ以降、おおむね時期に関係なく「墓」について詳細な調査が行われるようになった。この調査が、現在までの中近世「墓」遺構の調査・研究に関する礎となったといっても過言ではなからう。

ただし、これ以後も体系的に「墓」について論じたも

のは県内になく、池畑耕一・中村純治（池畑・中村1984）・上床真（上床2002）などが一部でふれるのみであった。

この他に特筆すべきものとして、「周溝墓」がある。県内では、1990・1991年に実施された松山町京ノ峯遺跡の調査において初めて認められた（松山町教委1993）。弥生時代～古墳時代の円形周溝墓群の中に2基のみ存在することから、当初はそれらと同時期の可能性も考えられたが、周溝内から五輪塔の一部が発見されたこと、「円形」でなく「方形」であることから中世のものであるとされた。その後、隼人町菩提遺跡（隼人町教委1998）などでも発見されるようになり、県内でも各地に存在することが明らかになってきている。

3 鹿児島県内の中世墓調査事例

ここでは、鹿児島県内各地の中世墓の事例について形態を中心として紹介したい。

放光寺遺跡（高尾野町）《表1-2》

集石墓とみられる遺構が3基、石室墓とされる遺構が3基、土坑墓とみられる遺構が13基発見された。特にC地点の「禪積の塚」と呼ばれる遺構では、塚部分から石室墓1基が検出され、それを中心に直径1m前後の6基の土坑がめぐっていた。これらの土坑は石室墓を切っており、前後関係が認められる。さらに塚部分の裾部分には、7基の土坑が塚を取り巻くように存在した。

ただし、塚のようにみえるのは裾部分が後世に削平されたためということが明らかにされているので、厳密な意味での塚とは異なる。

北九州市に存在する宗林寺墓地跡には、上饅頭状の盛土の周囲に配石をもつ形態のものがあり（松田直2003）、これが「石室墓」とされた遺構に類似する。ただし、宗林寺墓地跡の場合は追葬が行われているので、放光寺遺跡の遺構の性格についても検討が必要である。経塚である可能性も視野に入れて検討すべきであろう。

ところで、「放光寺」という名称はあくまでも小字地名によるもので、寺院があったという伝承すらないようである。

鍛冶屋長場遺跡（薩摩川内市）《表1-13》

長方形土坑墓3基が発見されていた。土坑墓1からは、洪武通寶2枚・大中通寶1枚が、土坑墓2からは、洪武通寶7枚が出土した。

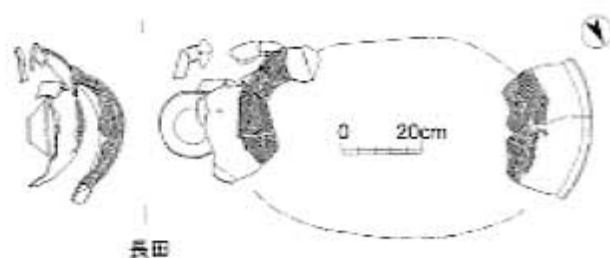
土坑墓2と土坑墓3からは、木棺の痕跡とみられるものが発見された。

上野城跡（薩摩川内市）《表1-12》

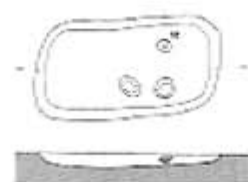
副葬品を伴う長方形土坑を「土坑ⅡB類」としている。このタイプは、4基発見された。この中からは、洪武通寶・永楽通寶・白磁椀などが出土した。

平松原遺跡（始良町）《表1-5》

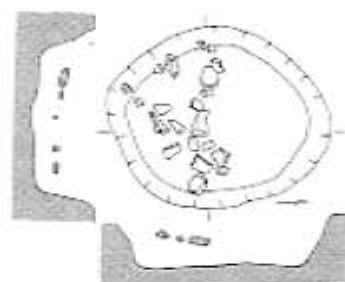
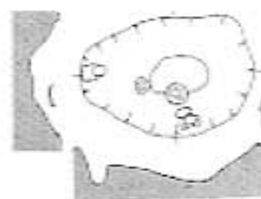
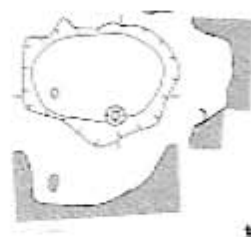
円形墓が1基発見された。埋土内から洪武通寶が3枚



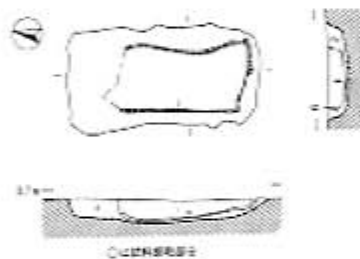
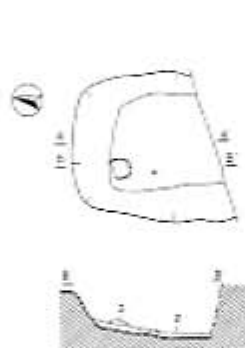
長田



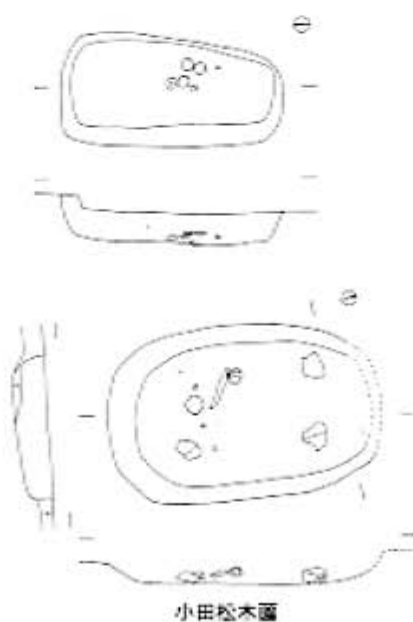
長田



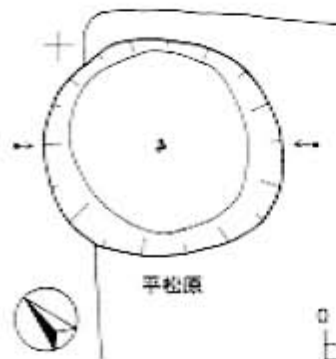
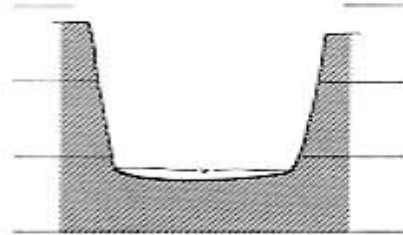
日光寺



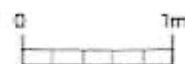
駿河屋馬場



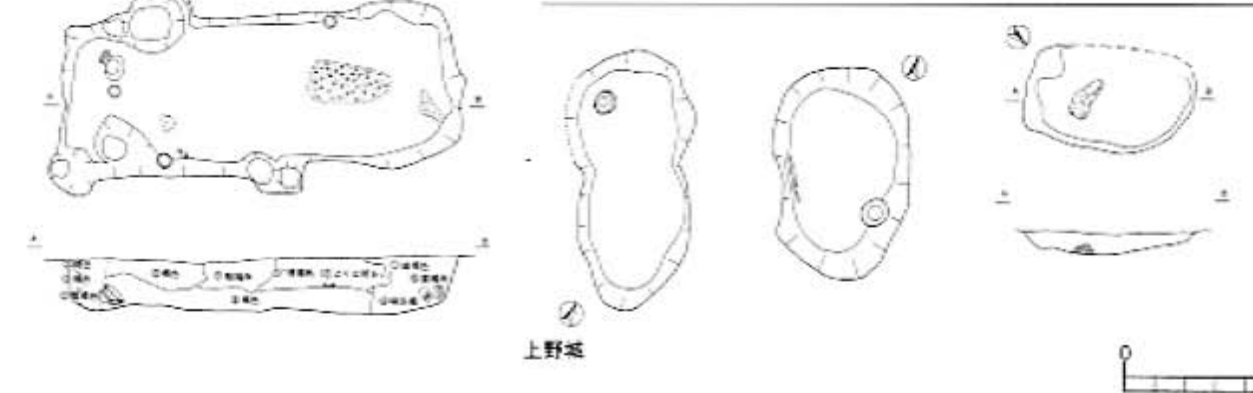
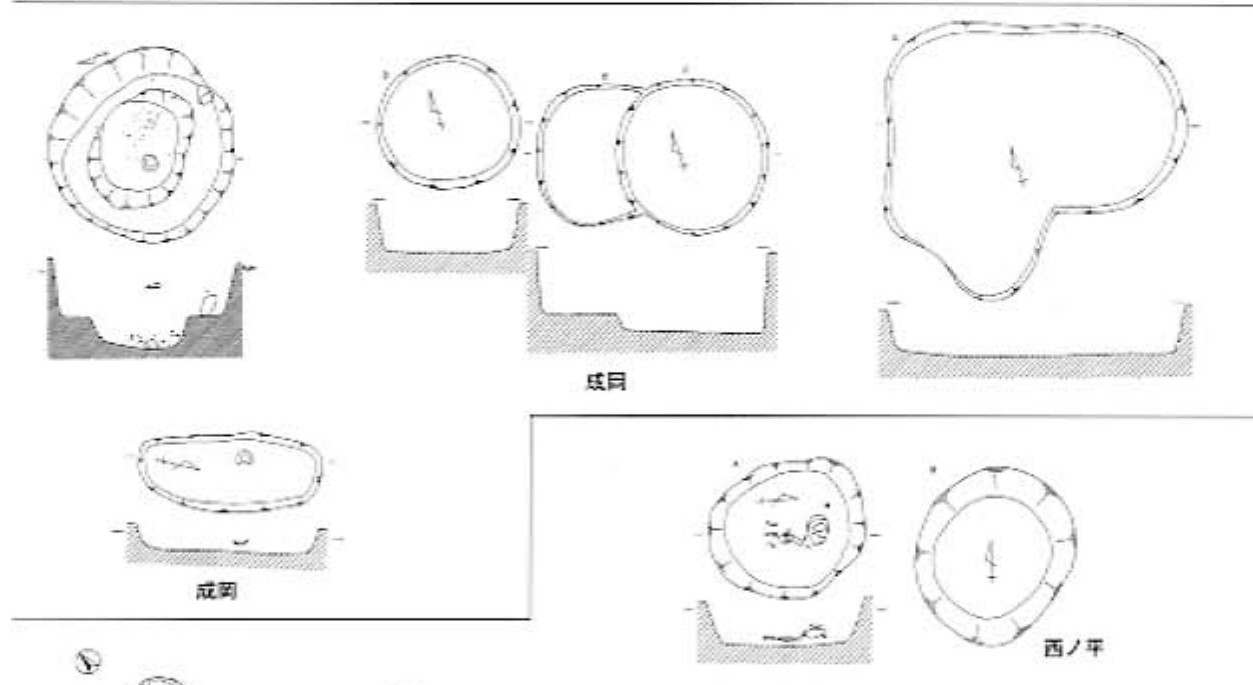
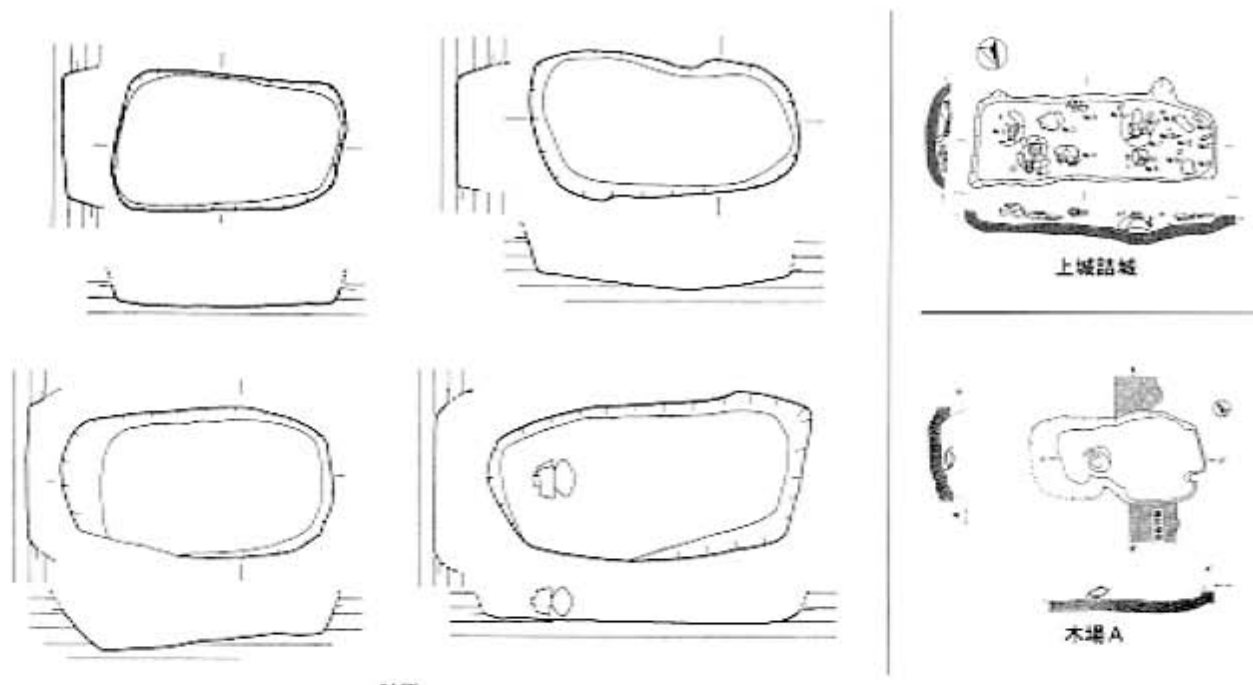
小田松木園



平松原



第1図 土坑墓(1)



第2図 土坑墓(2)

出土しているので、中世後半期以降のものであると考えられる。

成岡遺跡（薩摩川内市）《表 1-10》

室町・南北朝時代の墓は9基の円形墓がある。中世墓Aは1基単独であるが、残りの中世墓B～Iは集中して存在していた。

ところで、報告書中では「墓」とされないものの、その可能性のあるものとしては土坑Iがある。

土坑Iとされた長方形土坑からは、青磁椀花皿が出土している。これを副葬品と考えれば、土坑の形態から中世墓の可能性を考えたい。

西ノ平遺跡（薩摩川内市）《表 1-11》

室町・南北朝時代の墓として3基の遺構が取り上げられている。内訳は、円形土坑（ここでは中世墓坑A・Bとされる）2基・火葬遺構1基である。

中世墓坑Aからはやや瘦りのよくない人骨と共に、元豊通寶1・紹聖元寶1・洪武通寶2・永樂通寶1・朝鮮通寶1・不明4が出土した。

中世墓坑Bはほぼ人骨は残存していなかった。洪武通寶が5枚・木片の付着した鉄釘が11本出土した。

火葬遺構からは、木炭とともに骨片・洪武通寶7枚・青磁椀が出土した。

不動寺遺跡（鹿児島市）

五輪塔と墓石塔からなる石塔群について、記録調査（発掘調査ではない）が行われている。ただし、五輪塔石については101個（五輪塔のパーツがばらばらになっている）が、江戸期年号銘の墓石塔については6基を取り上げ実測している。五輪塔群は、中世末から江戸中期頃のものと考えられる。墓石塔群は「享保15（1730）年」「明和元（1764）年」「安永7（1778）年」「天保11（1840）年」のものが確認されており、五輪塔と墓石塔群の関係については今後の研究が期待されよう。

なお、この遺跡は伝承で寺があったことが伝えられるのみで、明確な来歴・由緒については明らかでない。1830（文政18）年になされた「帖佐来歴」には14世紀後半頃（南北朝時代）に創建された「宝動寺」の記述が出てくるが、この寺であった可能性が指摘される（鹿児島市教委1996）。

木場A遺跡（栗野町）《表 1-15》

土坑が3基発見されているが、その中で特に土坑1が注目される。土坑の北辺近くから土師器皿が3枚重ねられた状態で発見された。

長田遺跡（有明町）《表 1-1》

長方形土坑墓が2基発見された。1号墓からは玉縁口縁の白磁椀が発見されている。2号墓からは、ほぼ完形に復元される土鍋と玉縁白磁椀が発見された。土坑墓の掘り込みは確認されていないが、写真から楕円形（長方形）のプランが明らかになっているので、土坑墓の可能

性が高いものとされる。

原口遺跡（日吉町）《表 1-8》

3基の土坑が発見されており、そのうちの土坑2・3については土坑墓の可能性が指摘された。

土坑2は、長方形で中央部は深くピット状になっているのが特徴である。遺構内から、ほぼ完形の内黒土師器椀・土師器皿が発見されている。

土坑3は、ほぼ円形で西側が深くピット状になっているのが特徴である。遺構内から、完形の内黒土師器椀・土師器皿が発見された。

小田松木遺跡（隼人町）《表 1-4》

中世のものと考えられる土坑が約10基発見された。その中で、第61号土坑と第65号土坑から銅製の鏡が出土している。ともに長方形土坑である。

第61号土坑からは、銅製の鏡、鉄製の小刀・鎌？、青白磁製合子、引き出しの取っ手などが発見された。これらは、木箱や和紙に入れられていたようである。

第65号土坑からは、湖州六花鏡、鉄製の小刀、蓋付きの白磁、開元通寶、滑石製品破片などが発見された。

針原遺跡（市来町）《表 1-6》

7基の長方形土坑墓が発見されている。これらは調査区域の問題もあるが、ほぼ直線に並んでいる。遺構内からの遺物の出土はみられない。土坑7からは空風輪（五輪塔のもっとも上の部分）が発見されているが、周辺が削平された時点での混入と考えられている。

遺跡は八房川にほぼ隣接する位置にあるので、河川交易に関する遺跡の可能性が考えられている。また、これらの土坑墓群については、「河土氏の墓」もしくは川上地区の共同墓地である可能性が指摘されている。

上城詰城跡（市来町）《表 1-7》

調査担当者は墓とはしていないが、状況から墓の可能性が高いと考えられる。SK-12がそうである。長方形土坑で、遺構内から土師器の坏7と皿4が出土した。

この他にも、土坑墓に類似した土坑が各地で発見されている。薩摩町中津川城跡《表 1-34》・根占町滝見遺跡《表 1-35》・鹿児島市榎木原遺跡《表 1-36》などで発見されている。これらは、遺物が発見されないもの、人骨などの痕跡が明らかでないものなどが含まれる。これらのいくつかは形態から土坑墓の可能性が考えられるが、決めに欠けるものである。

また、上記の土坑墓以外にも中世には骨蔵器・周溝墓・塚などが存在することが明らかになっている。

骨蔵器（蔵骨器）は、県内では志布志町山宮神社や、大口市平出水遺跡などで発見されている。吾平町川北遺跡では、五輪塔の下から古墳時代の土器である成川式土器の壺が骨蔵器に転用されたものが発見されている。

周溝墓は、松山町京ノ峯遺跡《表 1-27》、隼人町菩提遺跡《表 1-28》、鹿兒島市山下堀頭遺跡《表 1-29》、金峰町建石ヶ原遺跡《表 1-30》で発見されている（上床 2002）。これらの周溝墓については、別稿で述べたことがあるので、ここでは紹介のみにとどめておきたい（上床 2002）。

塚の調査は大隅町東馬場遺跡《表 1-42》で実施されている。中世石塔（板碑）の周囲に存在する 2 基の塚についての調査である。その結果、1 基は自然地形を利用したもので、もう一つは人為的に盛られたものであった。ただし、遺物は発見されなかったため性格は明らかでない。

加世田市島津忠国公（島津 9 代目・1470〔文明 2〕年没）墓の宝篋印塔の下からは、遺骨とともに山川石製とみられる石製骨蔵器が発見された（加世田市史編さん委員会 1986）。また、六角堂の礎石も発見されているので、墳墓堂の痕跡が確認された数少ない例である。

また、発掘調査は行われていないが、同じ加世田市内には、島津忠貞公（1468〔永禄 11〕年没）・島津貴久公（島津 15 代目・1571〔元亀 2〕年没）の火葬跡がある。現在、そこには石塔が残っている。火葬を行った場所が、明らかであるのは重要であろう。

南島でも中世の骨蔵器は発見されている。笠利町宇宿貝塚と喜界町山田中西遺跡では、南島須恵器（カムイヤキ・類須恵器とも呼称される）を利用した骨蔵器が発見されている。これらはおおむね 12 世紀から 13 世紀頃の時期が考えられている。

次の章では、以上に示した県内の様相を踏まえ、全国の中世墓の分類研究について取り上げる。そのうえで県内の中世墓と比較したい。

4 中世墓の分類についての覚書

(1) 中世墓分類の研究

斉藤忠は、火葬墓における諸形態の分類を以下のように行っている（斉藤 1993）。

- ・第Ⅰ形式：火葬施設をそのまま墓にしたもの
- ・第Ⅱ形式：地表下の小土壇や蔵骨器などが主体をなすもの
- ・第Ⅲ形式：地表下の石塊の敷設や石組み遺構などが主体をなすもの
- ・第Ⅳ形式：地上の盛土が主体をなすもの
- ・第Ⅴ形式：地上の標識・供養的な施設としての五輪塔・木標・立石などが主体をなすもの。

さらに、第Ⅱ形式の地下の遺構や蔵骨器などが主体をなすものについて次のように細分する。

- 1：地下の遺構が小さい土壇であり、その中に焼骨を直接または布袋などに包んで納めたもの
- 2：地下遺構の小土壇などに蔵骨器の類を納めたもの
- 3：地下に石積みなどの施設を設けて、焼骨を納めたり、有機質の容器などに焼骨を納めたもの

九州では中村修身の研究がある（中村 1990）。この中で中村は、川上秀秋による研究（川上・前田 1984）から「川上秀秋は、椎木山遺跡の再検討をおこない、『外部施設』『地上標識』『内部施設』に分類し、検討をおこなっている。」として、以下のように分類している。

- ・Ⅰ類：基壇状積を呈するもの（石組内部が地山整形によって土壇状に削り出されたものをⅠA類、土を充填させる方式のものをⅠB類とする）
- ・Ⅱ類：土壇状を呈するもの
- ・Ⅲ類：長方形石囲いを呈し、内部施設を 2 基有す（その間には石組の共用部分を有さないもので、同類のものが連鎖的に結合するもの）
- ・Ⅳ類：石囲いを呈し、内部施設が 1 基のもので略正方形のものをⅣ₁、略長方形のものをⅣ₂とする（囲い石の一边を共用する形で連鎖的に結合しあう）
- ・Ⅴ類：礫を集積したもの
- ・Ⅵ類：外部施設を有さず埋葬施設のみのも

平野和男は、静岡で発見された中世墳墓を、形態や構造の面から分類している（平野 1997）。「考古学用語としては新造語で定着していないものもあるが、次のような概念をもった墓制が認められる」として、墳丘墓（塚墓）・土壇墓・集石墓・茶毘墓の 4 つを掲げる。

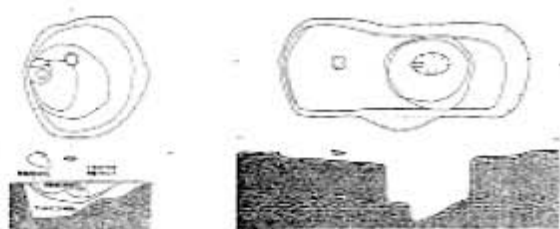
筆者はこの平野分類を大枠では支持したい。この分類によって、形態の違いの理解が可能であるからである。この中で、塚墓（周溝墓）と集石墓について注目したい。

太田三喜は、全国の周溝墓（塚墓）について類例を集め、検討をおこなっている（太田 1997）。ただし、ここでは鹿兒島県内の事例は紹介されていない。

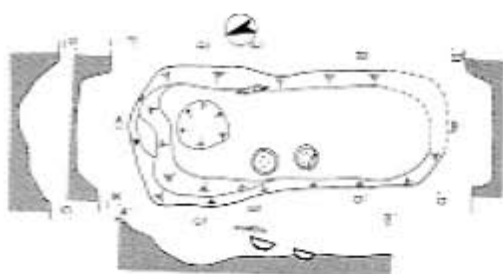
県内をはじめとして九州では中世にも周溝墓が多く発見されているが、この論稿によれば、九州以外でも中世の周溝墓は全国各地で発見されているようである。特に、静岡県一の谷遺跡では「塚墓」と呼ばれる類似の埋葬遺構が発見されており（網野・石井ほか 1997）、中世における一般的な墓制の一つであったことが類推される。ただし、この周溝墓状の遺構は、発掘調査の結果、明らかな墓以外にも経塚・宗教的施設・祠跡・火葬塚・茶毘墓・詣り墓などであった例が各地で確認されている。つまり、周溝を伴う「塚」として記念物・祭祀物を目的としてつくられたものもあるようだ。例えば、隼人町菩提遺跡では、主体部（土壇部分）からは人骨以外の成分（礫）などが発見されている（隼人町教委 1998）。

また、木下忠によれば、岩手県宮日野十三塚遺跡のように十三塚の発掘調査を行った結果、方形周溝状遺構となった例もある（木下・中村 1985）ので、形態だけをもって周溝を有する「墓」とするにはさらに慎重な判断が必要となろう。

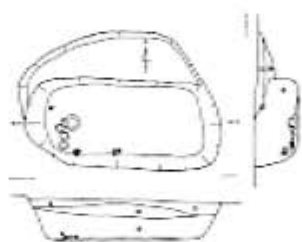
また、山村宏は、一の谷遺跡で発見された各種の中世墓について述べている（山村 1997）。この中に集石墓に



原口



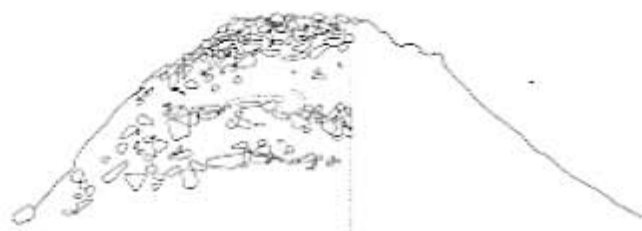
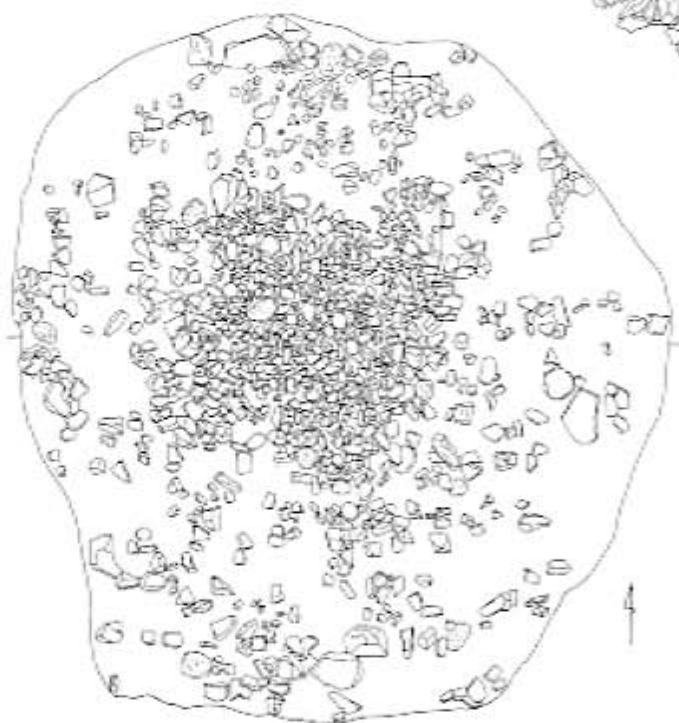
上加世田



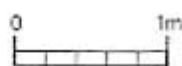
土坑墓

久保崎Ⅳ

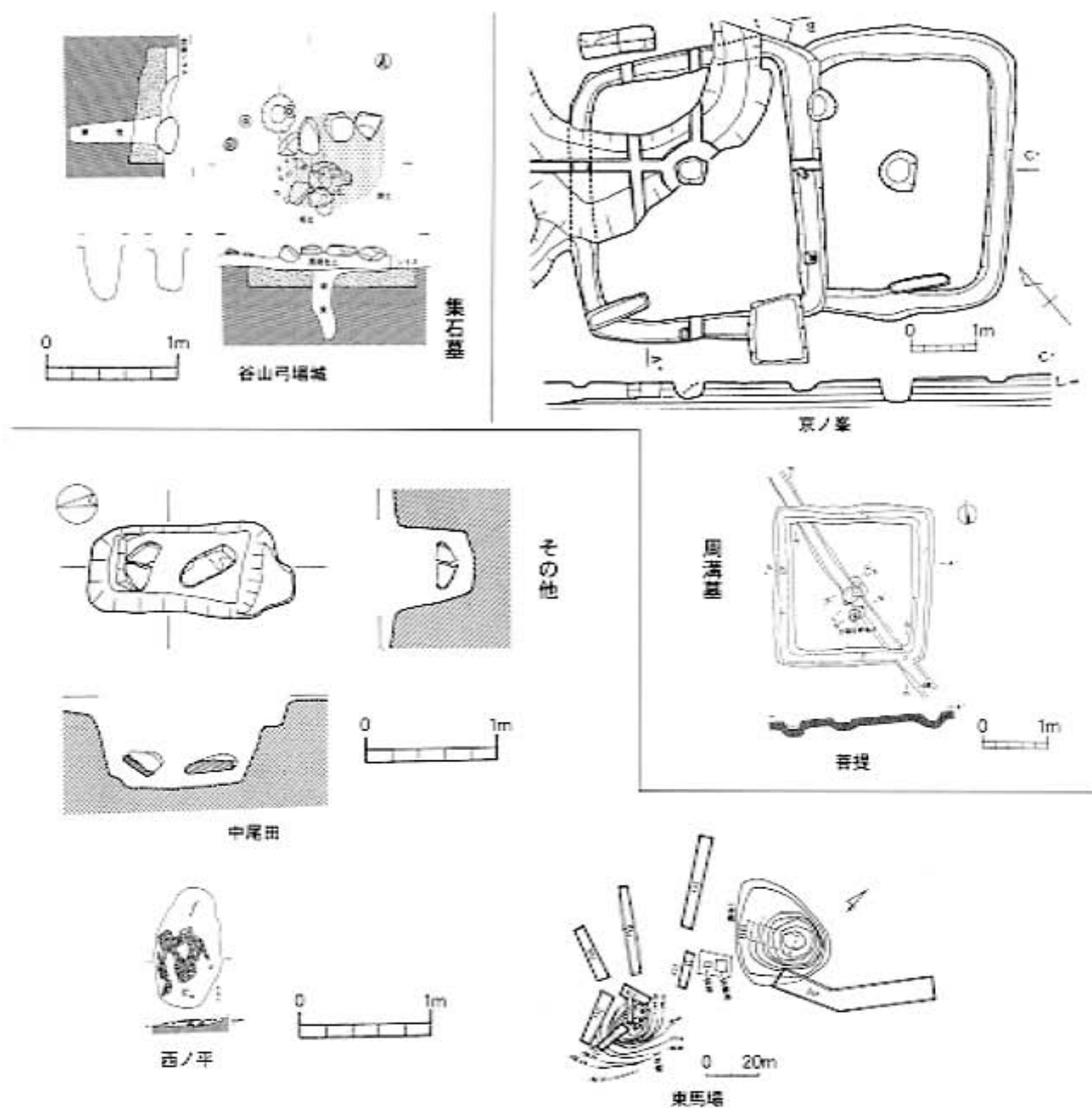
集石墓



致光寺



第3図 土坑墓(3)・集石墓(1)



第4図 集石墓(2)・周溝墓・その他

についての説明がある。次に長くなるが引用する。「外面的にはほぼ方形に積み上げた被覆石を2～3段取り除くと、下部に集石墓の本体構造をみる。縦長の円礫の長辺を接合して方形に閉鎖した区画縁石が墓域を示し、その内側はやや小型の円礫を平面的に詰石している。方形の中心部には埋葬主体部を表す円形もしくは方形を呈する圍繞礫がある。圍繞された主体部の内側は小型で偏平な円礫で花弁状に配石し、中心部には花弁に対する花芯を表現したごとく数個の礫を縦位に詰めている。この主体部詰石の下部は円形や方形の小型の土壇が穿たれ、内部に火葬人骨を埋納する構造である。」

これら以外には、墳墓堂や茶毘墓などの数種の墓が存在する。例えば、墳墓堂の復元にあたっては、狭川真一による研究がある(狭川2002)。県内においても、加世田市島津忠国公墓で六角堂とされる6つの礎石跡が発見されているが、これ以外では明らかでなく、特殊なものであった可能性もある。

(2) 鹿児島県内における中世墓の分類

前項で中世墓には様々な形態がみられることが明らかとなった。おおまかに4つの類型(土坑墓・集石墓・周溝墓・その他)に分類される。以下にその傾向を述べてみたい。

①土坑墓

おおまかには、長方形土坑墓（木棺墓）と円形土坑墓（桶墓）に大別できる。

長方形土坑墓（木棺墓）は、長楕円形・隅丸長方形とされるものも含まれる。基本的には、遺構内から鉄釘が出土することが多いことから、長方形の土坑の中に木棺による埋葬が行われたと想定する。ただし、木棺を用いない埋葬も行われた可能性もあるので、ここでは土坑の形態を重視したい。中世的な墓制としては、この形態がもっとも代表的なものであろう。ただし、笠沙町西之園遺跡《表 1-51》・知覧町南別府城《表 1-50》・大口市新田遺跡《表 1-57》・鹿屋市前畑遺跡《表 1-47》では、近世のものが発見されているので、今後詳細な検討が必要であろう。

円形土坑墓（桶墓）は、楕円形などとされるものも若干含まれる。基本的には、桶形の棺による埋葬が行われたと想定され、「座棺」とも呼称される。場合によっては、深さが 3 m 近くになる場合もあるが、この場合女性のものであるとされる（金峰町花瀬地区の聞き取りによる）。中世にもみられるが、近世に多くみられることから、近世的な墓制であると考えたい。

②集石墓（石室・配石・集積とされるものなどを含む）

高尾野町放光寺跡《表 1-2》・鹿児島市谷山弓場城跡《表 1-17》でみられたような、石室墓・配石墓・集石墓などとされるものを指す。現在のところ、中世では 3 か所、近世では大口市王城古墓《表 1-58》でしか発見されていないが、特徴的なため取り上げた。基本的には、墓標を除く部分で石を用いたものを指す。この中には、地下に石室を有するもの、地上・地下ともに石組みを有するもの、地上のみ石塔の基盤として石組みを有するもの全てが含まれる。つまり、石組みがみられる場合はすべて集石墓としたい。ただし、今後さらに細分が可能であることはいうまでもない。

③周溝墓（塚墓・貝溝墓類似遺構を含む）

ここでは、太田による先行研究を支持し、明確な「墓」でないものも含む。現在のところ、県内では松山町京ノ峯遺跡《表 1-27》・隼人町菩提遺跡《表 1-28》・吹上町建石ヶ原遺跡《表 1-30》・鹿児島市山下堀頭遺跡《表 1-30》で確認されるのみであるが、そのいずれもこの分類に含まれる。

④その他（五輪塔等に関わる骨蔵器・火葬墓・墳墓堂・茶毘殿などを含む）

①-③の分類に含まれなかったものをまとめた。いずれも、数が少なく県内ではあまり発見されていないものである。

以上の分類は、あくまで筆者がおおまかに行ったもので、全国的にはさらに細かく分類されるものも含まれる。

ところで、中世の一般民衆の墓はどのようなものであ

ったのだろうか？これを解明するのは困難である。千田嘉博によれば、惣墓（共同墓地）について「形成時期を中世後期と考えることは共通の評価である」（千田 2001）という。鹿児島県内においてもこの頃に庶民の墓があってもおかしくはないのだが、いまだ確認されていない。これまでの研究をみると、たとえば水藤良は、14 世紀のはじめの著作の『八幡愚童訓』中で、野捨てという死体遺棄が行われている記述がみられるという指摘をうけて、「身分による葬法の差は相当なものがあつたと考えられる」としている（水藤 1986）。今後、検討されなければならない課題であろう。

5 まとめ

今回得られた成果からは、あらためて資料の少なさを実感させることとなった。しかし、その中からおぼろげながら傾向がみえてきたことも事実である。これまでの結果をふまえ、鹿児島県内の状況を見ると次のようになる。

県内の発掘された中世墓は、おおむね 4 つに分類される。それは、①土坑墓②集石墓③周溝墓④その他である。

長方形土坑墓は、遺構内から鉄釘とみられる鉄製品が発見されることが多いことから木棺墓とされる。また、鹿児島県は火山灰の堆積が顕著であり、火山灰土壌は酸性で人骨が残りにくいことから、鉄釘と六道銭の存在をもって長方形土坑を「墓」とする場合もみられる。

円形土坑墓は、「桶墓」とであるとされる。この場合もまた、形態や六道銭によって「墓」とされることが多い。ただし、長方形土坑墓と比較すると人骨が残存している例が多く、この場合はやや確実性が高い。従来は男性よりも女性の墓の方が深く掘られているといわれている。確かに、山村や農村部において、昔（この場合は多くは戦前）の墓について聞き取りを行うと、やはりその通りであるようだ。ただし、形質人類学的方法や科学分析などによって検証された例はないようである。また、土坑内の土壌と、周辺土壌とのリン酸分析による比較がなされている調査についてもほとんどないようである。

これらの土坑墓の形態の違いによる時期差については、数のうえから長方形のものが中世的で、円形のものゝ近世的である可能性も考えられる。しかしながら、笠沙町西之園遺跡では、「享保」と記された墓碑が長方形土坑から発見されている（鹿児島県教委 1978b）ので、必ずしもそうでないようである。さらに様々な観点からその要因を考えていく必要性があろう。

「墓域」の問題について、県内の事例では、明確にされた例がほとんどみられない。わずかに、成岡・西ノ平遺跡で土坑墓が集中する地区があつたというくらいである（鹿児島県教委 1983b）。行政調査では、調査範囲に

関して制約を受けるためであろう。

6 おわりに

以前、筆者は中世の煮炊具について検討を行ったことがある（上床 2004）。この中で、墓とみられる遺構中から煮炊具が発見されている事例について知ることとなった。試しに類別を求めてみたところ、鹿児島県内においては墓に関する基本的な研究がほとんどなされていないという現実を知ることとなった。そこで、今回は県内の発掘調査によって発見された中世墓の集成を行い、研究の現状と課題について述べた次第である。

ところで、今回取り上げなかったが、鹿児島市大甕遺跡（鹿児島市教委 1979 等）の事例なども注目される。明確な中世墓は確認されていないようであるが、福昌寺墓地に近いことと、おびただしい数の土坑群が発見されていることから、この中に中世墓が含まれている可能性も少なくないと考えたい。今後の研究の進展が期待される。

恵美昌之は、中世墓の調査研究に関する注意事項を次のように述べている（恵美 1990）。

「中世武士団や庶民の墓制・葬制の究明にあたっては、次のような点に注意する必要がある。（1）集落と墓地、（2）館と墓地、（3）遺跡（墓地）にかかわる被葬者、（4）遺跡内での土葬と火葬のちがい、（5）集石墓など遺構の形態的分類、（6）墳墓堂のあり方、（7）火葬場、（8）供養のあり方、（9）石塔婆、下部遺構と供養の内的一連の関係、（10）火葬容器の需要関係、（11）墓地および被葬者のかかわる宗教的・歴史的背景などの研究課題を踏まえ、地域に根ざした調査研究の進展が望まれる。」

鹿児島県内の中世墓の調査・研究に関しても、これらの点に注意して行っていきたいものである。

現代人にとって墓とは詣るもので、故置すべきものではない。しかし、地域や時代が変われば、墓に対する認識も異なる。例えば、近寄るものではないとされたり、逆に墓地自体が聖地化されることもあるようだ²¹。現代の鹿児島県内の多くの墓地では、墓前に供える花が常に絶えることはない。実は、このことは他地域から見ると、珍しいことであるらしく、花卉消費量が国内で最も多いのである。これは、墓に対する立場が、時間や地域の違いで変化するという好例であろう。

現代に生きる我々にとって、先祖にも関わる墓についての問題は非常に密接な問題なのかもしれない。

【 註 】

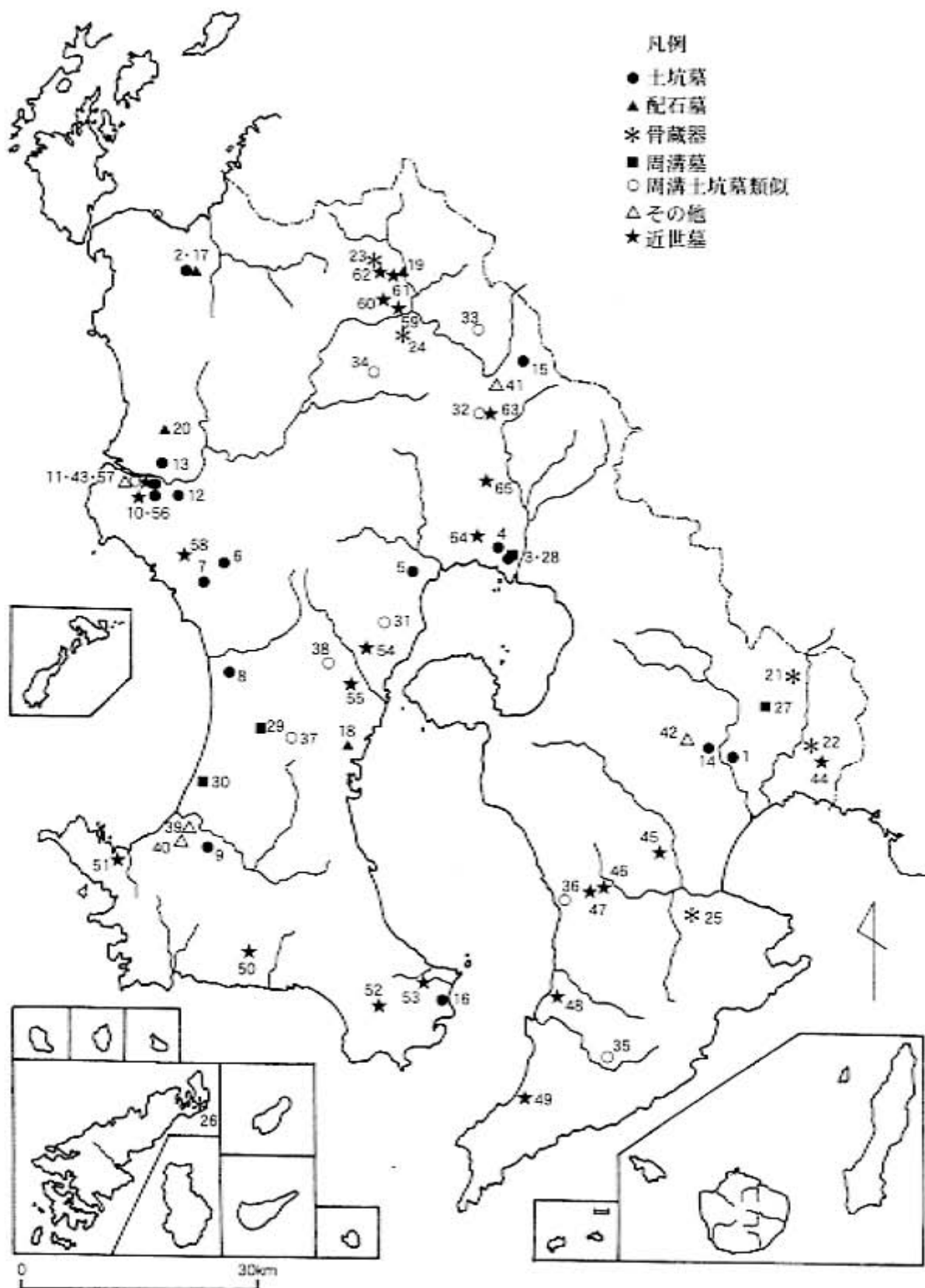
1 浅香恭輔によれば、「現在では各市町村によって土葬禁止区域が設けられている。たとえば東京都では、条例によりほぼ都下全域が土葬禁止区域となっている」という（浅香 2001）。

2 新谷清紀によれば、奈良県、三重県などで「盆にも彼岸にも墓参りなどしないという事例が点在している」という。これは「墓地は死穢の充満している場所であり、強く忌避すべきものであるという観念」である（新谷 2003）。

【参考文献・報告書】

- 有明町教育委員会 2003 「長田遺跡」『有明町埋蔵文化財調査報告書』（2）
- 市来町教育委員会 2000 「上城跡城跡」『市来町埋蔵文化財調査報告書』（7）
- 指宿市教育委員会 1990 「中島ノ下遺跡」『指宿市埋蔵文化財調査報告書』（7）
- 1995 「橋幸礼川遺跡」『指宿市埋蔵文化財調査報告書』（20）
- 大口市教育委員会 1982 「平泉城跡」『大口市埋蔵文化財調査報告書』（1）
- 1985 「広徳寺跡古墓・王城古墓」『大口市埋蔵文化財調査報告書』（4）
- 1992 「新田遺跡」『大口市埋蔵文化財調査報告書』（9）
- 大隅町教育委員会 1998 「東馬場遺跡」『大隅町埋蔵文化財調査報告書』第 17 集
- 2003 「久保崎IV遺跡」『大隅町埋蔵文化財調査報告書』第 32 集
- 大根古町教育委員会 1992 「出口遺跡」『大根古町埋蔵文化財調査報告書』第 5 集
- 鹿児島県教育委員会 1976 「放光寺遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 2 集
- 1978 「桑ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 7 集
- 1978 「西之宮遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 8 集
- 1980 「石峰遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 12 集
- 1981 「加治屋園遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 14 集
- 1981 「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 15 集
- 1981 「加菜山遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 16 集
- 1982 「山崎B遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 18 集
- 1983 「若辛城跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 27 集
- 1983 「成岡・西ノ平・上ノ原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第 28 集

- 1987「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第44集
- 1989「中ノ丸遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第48集
- 1990「前畑遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第52集
- 1991「平松原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第58集
- 1992「榎崎A遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』第63集
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1994「針原遺跡(川上氏古墓)」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第8集
- 2002「小倉畑遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第34集
- 2002「鍛冶屋馬場遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第39集
- 2003「森・白金原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第55集
- 2003「前畑遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第56集
- 2004「上野城跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第68集
- 鹿児島市教育委員会 1979「大龍遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財調査報告書』第1集
- 1982「大龍遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財調査報告書』第2集
- 1986「大龍遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財調査報告書』第7集
- 1992「谷山弓場城跡」『鹿児島市埋蔵文化財調査報告書』第11集
- 1992「大龍遺跡 第1集 歴史時代編 大龍寺跡」『鹿児島市埋蔵文化財調査報告書』第15集
- 1999「若宮遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財調査報告書』第24集
- 1999「不動寺遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財調査報告書』第25集
- 2001「大龍遺跡B地点」『鹿児島市埋蔵文化財調査報告書』第34集
- 加賀田市教育委員会 1985「上加世田遺跡-1」『加賀田市埋蔵文化財調査報告書』(3)
- 串良町教育委員会 1994「新井城跡」『串良町埋蔵文化財調査報告書』(4)
- 串良町教育委員会 1999「中津川城跡」『串良町埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)
- 志布志町教育委員会 1990「鎌石遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)
- 知覧町教育委員会 1993「雨別府城跡」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
- 根占町教育委員会 1993「天目石近世墓」『根占町埋蔵文化財発掘調査報告書』(6)
- 1995「滝見遺跡」『根占町埋蔵文化財発掘調査報告書』(8)
- 隼人町教育委員会 1992「調査研究 小田松木苗遺跡」『隼人町立歴史民俗資料館年報』第2号 隼人町立歴史民俗資料館
- 1998「菩提遺跡」
- 菱刈町教育委員会 1985「山下遺跡」『菱刈町埋蔵文化財調査報告書』(3)
- 日吉町教育委員会 2003「原口遺跡」『日吉町埋蔵文化財調査報告書』(4)
- 枕崎市教育委員会 1981「松之尾遺跡」『枕崎市埋蔵文化財調査報告書』(1)
- 松山町教育委員会 1993「京ノ峯遺跡」『松山町埋蔵文化財発掘調査報告書』(7)
- 宮崎県教育委員会 1984「山内石塔群」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第1集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 1997「余り田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第1集
- 浅野増雄 2001「墓葬と供養 墓の諸形態」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 網野善彦・石井達ほか編 1997『中世都市と一の谷中世墳墓群』名著出版
- 石田茂作編 1984『新版 仏教考古学講座』第7巻 越山閣
- 池田 純 1993「不動寺跡についての一考察」『不動寺遺跡』鹿児島市埋蔵文化財調査報告書 (25) 鹿児島市教育委員会
- 池畑耕一・中村耕治 1984「大隅半島より出土の蔵骨器3例」『鹿児島考古』第18号 鹿児島県考古学会
- 上床 真 2002「九州における古代・中世の円墳(墓)遺構の集積と若干の考察—鹿児島県内の円墳墓を中心として—」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(34) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2004「鹿児島県の中世土炊具の横相」『縄文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 志美昌之 1990「墳墓中世」『歴史考古学の問題点』近藤出版社
- 太田三喜 1997「中世の円墳墓」『野田直先生古学記念論文



第5図 中近世の墓分布図(発掘調査事例)

表1 鹿児島県における発掘調査された中近世墓一覧

No.	遺 跡 名	所 在 地	内 容	出 典
中世土坑墓				
1	長田	西郷町原日長田	長方形2基・円形(11~12C)・土師甕	在明町埋文簿(1)
2	放光寺	高尾野町下高尾野字放光寺	土坑1基	県教委埋文簿(2)
3	香菱	新入町見次	奥境内・堀土の45°勾配では墓との結果	新入町埋文簿
4	小川松木墓	新入町小川松木墓	長方形土坑墓1基・黒州六彩甕	新入町資料館年報2
5	宇和原	船渡町宇和	円形土坑墓1基・伊武通宝3枚出土	県教委埋文簿(5.8)
6	針原	市来町大野	長方形土坑2基	埋文簿(8)
7	上瀬沼橋跡	市来町大野	58-12(長方形・厚7・直4)	市来町埋文簿(7)
8	原口	日古町古和原口	土坑2(長方形)黒色土器種・土師甕。土坑3(円形)黒色土器種・土師甕	日古町埋文簿(4)
9	上加保田	加保田市川原	長方形土坑・土師甕2・刀子	加保田市埋文簿(3)
10	高岡	薩摩川内市中屋島町	墓坑5~1(円形・切り合いあり)・土坑1	県教委埋文簿(2.8)
11	西ノ下	薩摩川内市中屋島町	中世墓坑2基・大瀬遺構1基	県教委埋文簿(2.8)
12	上野城	薩摩川内市百次町	長方形土坑4基・伊武通宝・木簡通寶・白磁甕	埋文簿(6.8)
13	鍋釜地馬場	薩摩川内市百次町	土坑3基	埋文簿(3.9)
14	久保崎古	大隅町川野久保崎	長方形土坑・土師甕6基(直2・直4)	大隅町埋文簿(3.2)
15	木瀬古	大隅町木瀬	長方形土坑・土師甕3基(直4あり)	県教委埋文簿(2.1)
16	橋守丸田	市来町十一町下庄	長方形土坑	市来町埋文簿(2.0)
集石墓(配石墓)				
17	放光寺	高尾野町下高尾野字放光寺	集石墓6基(うち6基は石室墓とされる)	県教委埋文簿(2)
18	石山の堀城跡	鹿児島市上通元町本城	堀に囲まれた中に白輪首5枚出土	鹿児島市埋文簿(1.1)
19	鍋釜古墳	大口市鍋釜	石室・中に伊武通寶・黒州六彩甕・高橋合子瓦	土坑1994
20	鍋釜	薩摩川内市城上町鍋釜・瀬戸口	土輪首の集石墓約6基	埋文簿(3.6)
中世骨甕墓				
21	山宮神社	志布志町安楽山宮神社	甕・片・合子・石室様遺構(古器物明細書)	小田1972
22	牧野	志布志町日之瀬牧野	器種不明・銅鏡から土人形・土馬	小田1972
23	平瀬	大口市平瀬水	合子	大口市埋文簿(1)
24	山宮原	大口市西太山宮原	銅鏡器・土輪首の埋文簿から中より発見	河野1994
25	川之	志布志町下原之川	成田式甕・土輪首より発見	志布・河野1994
26	宇留比草	吉野町宇留	銅製惣足(コムイナギ)蓋を持つ乳児骨(墓石には伴っていない)・銅製惣足(コムイナギ)惣足・輪首	特・小田1997
縄文墓式遺構				
27	宮ノ原	志布志町宮ノ原	方形周溝2基が切り合い・土は黒褐色	大口町埋文簿(1.1)
28	香菱	新入町見次	方形周溝1基	新入町埋文簿
29	山ノ堀跡	鹿児島市山ノ堀	方形周溝1基	土坑2000
30	尾石ヶ原	会通町の宮崎	方形周溝1基	土坑2000
土坑墓類似遺構				
31	加保田	鹿児島市川原町	溝が入った長方形土坑2基	県教委埋文簿(1.4)
32	中屋田	横田町中ノ	土坑周溝で集石2枚・骨土遺物は出土せず	県教委埋文簿(1.3)
33	山上	志布志町山上	直2~4C(円形土坑・中世以降)・小銅	志布志町埋文簿(3)
34	中津川橋跡	薩摩川内市川原字中津川	長方形土坑1基・板石あり・伊武通宝1枚	薩摩川内埋文簿(2)
35	龍見	鹿児島市川上字龍見	長方形3基(直2直4)	鹿児島埋文簿(8)
36	榎木原	鹿児島市高野町榎木原	長方形土坑1基・青磁甕	県教委埋文簿(4.4)
37	一ノ谷	伊集院町下谷一ノ谷	長方形土坑1基・石板あり・伊武通宝1枚	埋文簿(3.9)
38	志守橋跡	鹿児島市山田町内城	方形土坑5基	県教委埋文簿(2.7)
墓型不明遺構(その他)				
39	日吉台・喜久山氏墓	加保田市	大甕跡に石室を伴う	田原田吉史
40	高野原(古・近代)墓跡	加保田市	平野原で出土した遺物の出土・六角形石	加保田吉史
41	山崎古	鹿児島市山崎	塚状遺構	県教委埋文簿(1.8)
42	東野橋	大隅町宮川東野橋	塚状遺構	大隅町埋文簿(3.2)
43	西ノ下	薩摩川内市中屋島町	木炭・伊武通宝・青磁甕	県教委埋文簿(2.8)
近世墓遺構				
44	鎌石	志布志町新鎌石	円形2基・寛永通宝	志布志町埋文簿(1.6)
45	新井城跡	市来町山清水	円形16基・人骨・寛永通宝・江戸期には通風炉が存在	市来町埋文簿(4)
46	中ノ丸	鹿児島市大瀬町中ノ丸	土坑6基(5C頃)	県教委埋文簿(4.8)
47	前原	鹿児島市郷之原町前原	長方形6基・円形1基・寛永通宝・ガラス玉・鉛玉	県教委埋文簿(5.2)
48	出口	大隅町野原出口	円形1基・人骨・寛永通宝	大隅町埋文簿(3)
49	天日石志墓	鹿児島市日吉天日石	円形・人骨・寛永通宝・石塔・石鏡み	鹿児島埋文簿(4.9)
50	高野原橋跡	大隅町宮川東野橋	堀の下に方形1・長方形2・扁石・寛永通宝	大隅町埋文簿(4)
51	西ノ原	鹿児島市志布志西ノ原	長方形土坑墓6基	県教委埋文簿(8)
52	高野原石棺墓	高野原町日吉	石棺墓・人骨・寛永通宝(88)・寛永通宝(1)・元禄通宝(2)・不明	高野原町志布志改訂版1994
53	中島ノ下	鹿児島市西方中屋島	土輪首(木輪)埋文簿・伊武通宝	埋文簿(7)
54	野宮	鹿児島市池之上町	長方形8基・円形2基・円形1基・人骨・寛永通宝	鹿児島市埋文簿(2.4)
55	西野寺跡	鹿児島市西野	方形(長方形)1基・円形1基・人骨・寛永通宝・ガラス玉	埋文簿(4.0)
56	高岡	薩摩川内市中屋島町	長方形2基・人骨・寛永通宝・サセル・剣	県教委埋文簿(2.8)
57	西ノ下	薩摩川内市中屋島町	長方形6基(墓石を伴う)・人骨・寛永通宝・伊武通宝	県教委埋文簿(2.8)
58	市ノ原	市来町大野	長方形12基(うち7基は直方体)・人骨・寛永通宝	埋文簿(4.9)
59	広瀬寺跡古墳	大口市宮木字広瀬	江戸橋跡・円形土坑墓1基	大口市埋文簿(4)
60	新井	大口市宮木字新井	長方形2基・寛永通宝	大口市埋文簿(9)
61	玉瀬古墳	大口市山清水字玉瀬	円形土坑墓4基・人骨・寛永通宝・土輪首・1基は配石あり(集石墓)	大口市埋文簿(4)
62	平野城跡	大口市山清水字平野城の跡	円形・方形の墓の可能性のある土坑数基	大口市埋文簿(1)
63	中屋田	横田町中ノ	集石5基・寛永通宝17枚	県教委埋文簿(1.3)
64	中ノ丸	鍋釜町鍋釜	円形26基・人骨・釘	県教委埋文簿(7)
65	石野	鍋釜町鍋釜	円形土坑墓6基・寛永通宝・木製鉄玉	県教委埋文簿(11.2)
	新井市長公園跡	鹿児島市西野	天正8(1580)年築城に付し、石地蔵壇・地中に石室あり。伊武通宝・寛永通宝・銅製蓮生・寛永通宝(1569年発掘)	大口町埋文簿1974

集』 豊田直先生古希記念論文刊行会 真福社

小田富士雄 1972 「大隅山宮神社発見の蔵骨器」『志布志町誌』上巻〔後に1988『九州考古学研究 歴史時代各論篇』学生社 に再録〕

小野正敏編 2001 『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会

加世田市史編さん委員会編 1986 『加世田市史』下巻 加世田市

上村俊雄 1994 「南九州出土の瀬州製について」『人文科学論集』第39号 鹿児島大学文学部紀要 鹿児島大学法文学部

川上秀秋 1984 「遠賀郡東部における中世墓について」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第33集 (財)北九州市教育文化事業団

木下忠・中村ひろ子ほか 1985 『十三塚 実測調査・考察編』神奈川大学日本書文化研究所調査報告 第10集 平凡社

河野治雄 1984 「大口市百太良の山之城原石塔群調査概要」付記「大口市山城原と吾平町川北出土の蔵骨器」『南九州の石塔』5号 南九州石塔研究会

2001 「一ノ谷遺跡の五輪塔群について」『一ノ谷遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第31集 鹿児島県立埋蔵文化財センター

斉藤忠 1987 『東アジア葬・墓制の研究』第一書房

1993 「中世の火葬墓と一の谷中世墳墓群」『一の谷中世墳墓群遺跡調査報告書』静岡県豊田市教育委員会(後に斉藤忠1996『墳墓の考古学』斉藤忠著作選集4 雄山閣 に再録)

狭川真一 2002 「南北朝時代の墓制」『中近世土器の基礎研究』XVI 日本中世土器研究会

秋谷忠章・上野精志 1975 「九州」『新版仏教考古学講座』7 雄山閣

秋谷忠章 1990 「大分県における中世墳墓の検出—五年の発掘調査から—」『大分県地方史 大分県の中・近世墳墓特集』第137号 大分県地方史研究会

新東晃一 1976 「牟婁における共同体社会の崩壊期について」『牟婁文化』2号 牟婁文化研究会

水藤真 1986 「備後大田荘の石造物と現地調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第9集 第一法規

川内郷土史編さん委員会編 1974 『川内市史 石塔編』川内市

千田喜博 2001 「惣墓理解のための基礎的前提」『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究(科研費報告書)』国立歴史民俗博物館

高橋 健自 1919 「中世の墳墓」『史林』4-2

中村修身 1990 「中世墓の背景—筑前国(福岡県)遠賀郡の検討—」『九州上代文化論集 乙益重隆先生古希記念論文集』同記念論文集刊行会

根占町郷土史編さん委員会 1974 『根占町郷土史』根占町

原田昭一 1994 「大分県における中世後半期の墓制変革—地

下式墳の成立と展開を通して—」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI 同志社大学考古学シリーズ刊行会

1999 「大分県における中世墓制変遷路史」『考古学』に学ぶ 一遺構と遺物—同志社大学考古学シリーズVII 同志社大学考古学シリーズ刊行会

平野和男 1997 「静岡県内の中世墳墓のあり方」網野善彦・石井進・平野和男・峰岸純夫 編『中世都市と一の谷中世墳墓群』名著出版

堀尾孝志 2004 「2003年の考古学界の動向 中世 九州」『考古学ジャーナル』№516 ニュー・サイエンス社

松田朝由 2003 「島津本家における近世大名墓の形成と特質」『研究紀要 織文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

松田直子 2003 「中世墓における追葬のあり方について—宗林寺墓地跡の調査から—」『研究紀要』第17号 財団法人北九州市芸術振興財団埋蔵文化財調査室

峰和治・小片丘彦 1997 「笠利町宇宿貝塚出土の蔵骨器内椀骨について」『宇宿貝塚 出土人骨編』笠利町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集 笠利町教育委員会

1997 「笠利町宇宿貝塚の新類遺器を伴う乳児骨について」『宇宿貝塚 出土人骨編』笠利町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集 笠利町教育委員会

森郁夫 1984 「近畿」『新版 仏教考古学講座』第7巻 雄山閣

森 浩一編 1975 『日本古代文化の探求 墓地』社会思想社

山村宏 1997 「一の谷遺跡について」網野善彦・石井進・平野和男・峰岸純夫 編『中世都市と一の谷中世墳墓群』名著出版

基山町遺跡発掘調査団 1978 「千塔山遺跡」

熊本県教育委員会 1973 「尾藤」『熊本県文化財調査報告書』第12集

【付記1】

口之島 慶元和尚の墓(十島村)
五輪塔のようなものがある。玉石・石を方墳状に盛り、そのうえに石塔を数基立てている。積石は大小2基ある。実際に計測は行っていないため、あくまでも写真および記憶によるが、大きいものは1辺が3~4m、小さいものは1辺が2m弱程度であった。本稿の分類では、「岡遺墓」の範疇に含まれる。起元の方々によれば、中世のものとしてされているが、今後の詳細な調査が必要であろう。

【付記2】

本稿を執筆中に、中世墓資料集成研究会によって『中世墓資料集成—九州編—』がなされた。この中で、中村和美氏によって、鹿児島県内で発掘調査された古代・中世の墓についての集約が行われている。また、10月2日には熊本県博物館において、研究会も催された。ここでも、中村和美氏によって「鹿児島県の中世墓」という題目で、各遺跡で発見された古代・中世の墓についての検出・変遷などについて報告が行われた。

正直なところ、執筆自体を考え直すべきかどうか悩むところもあったが、本稿には近世も含めた視点がするという違いがあることから、中村氏の報告とは重なる部分もあることは承知のうえで執筆を進めることとした次第である。